



^ 5  
6492





75  
6492



010186021709



甘き衣



糸をば



えらうりしこやうとまゝの旅のて  
ゆなのかくまうと思ふえはかへる田  
妻ははの人くあしうわてはちまう  
うりやううりやういさちまうのほほ  
くよせのおのすこふむそけい  
しとくしうりやう我を麻をねのあせふ  
のほほのかけちのむねうりやうふね  
梯のあれまやせにねあす



比らゆ月の昔あきなり木葉はむのま  
とくくあきくく 昔のふらむいやくく  
少くくゆる彼くく 時々木葉のま  
けもある川の膝張ちく

そののわくくやや月のみ

名子一錦時くく 又西々木るくくありあき  
あふつーくくーふあーのふくくゆりの  
子ゆりてふんくくあきくく一おの旅  
を北川とくくおふやーくくふ田か  
木るくく今にくくくくくくくく

これと木葉のくくくくくくくくくく  
よかゆんくくくくくくくくくく  
たふりくくくくくくくくくく  
らあきくくくくくくくくくく  
おからあき田原張くく馬場か  
事あきふくくくくくくくくくく  
張れくくくくくくくくくく  
ちくくくく

仲くくお娘張くくや月や  
きより武隈のくく通てくくくく



とあやふ馬りかあつよて同いさち  
さ田の城をせまひ山のことあひよふんで  
さう又我ら里のふれいすら小旅さ  
ころあ我ら旅のふあつ  
つくて飯をまふ例のふ帯をふるを  
あつあつ細をいんさうさうけうう  
ちのうー凡てを例の我ら家におし  
あまきとやおれさうのせえ人あ  
るらーかくあまふらと昔のさ  
ちのあちりちるさ

高田

けいれき遊子か拙る身勝手あつて  
新うあつてを笑すふ感をお  
の務生とさうさひ感らこ  
つ累とひかりせて乾き  
乃るあむけり一う一三平の風流  
とほくすたにさ月を十二おの  
あつては噂てやとあ



とてゐるふのうそて尸行

子と信

うのわら新ぬふ起て下  
旅のまひ

辭ふ

全領のま山崎一三十里 竹遊

功匠比々諺小流一廣はくひ 長子

馬の危小蛇りあをさるやえん 文也

市つれ林のむ小けくたを 早信

そのまるときくらをふふかひり 耳名

えまのむふとくねくま轉り 口水

そよのむやふのほえりん 月乙

磯砂やまえ子ふまけて入林の略 兵衛

入林の名のまふ味了和張の月 赤青

け捨小笠ふやとるふのふつ 里々

クウむのふ小柄板や宿の家 探乃

新家と和とるちと有る月 皎電



春日新田

例まに付のくくりのそ進を  
いづく市とてそあううあけり  
陳りうてあちのまーおちひを  
そーらふ秋おの履江下き  
の志とくまひけ前のか刺ち  
上戸の臂タムキをぬふ秋々ふ  
うてさふりをとくそりてふ

ふれれ仲家の遊歴をさめり  
道角ら世法の困狀をゆすいて  
先々切斗ちくうたあけり

るふ

此の端おけ志の先中折竹を  
ささるふ折り折力をやる衣 道角  
まきりあるるふ涼し三笠山 支尾



録別

らうくくにまき田のほれおめ 陸  
まのゆる狐尾のしふふふふ 石人  
くちうーのむのはらうふふふ 貫仙  
おのちまきくくあおのふけ 依巴  
まえ根ろくおくすふふふ 胡健  
あ月あや 陸勝のちかき 里風  
又ふ吹はれおけきあめ秋 許母

ま梅のすんすんいりすあさり ま  
はくくられりあきりあきり 盤尔

黒井

けき候ふ駒をやききき  
とくくをあのかきき  
まきあめ赤いそけいあきあ  
をあや月ありくくと小並 石  
きくあやまきくあきあ馬のあ 過



柿崎

ひしし穀香を人のけ地  
法柿の法派ありし  
源治の法時をく

柿崎やうをいふを  
はくおやねしうり  
をる年たの

瓶破頃

いし系柿のあ所  
はかふの系香ありし  
の系香を祈りし

柿崎

のものとありし  
ありしよふの次  
言ふくしを

柿崎の法派ありし  
柿崎の法派ありし  
柿崎の法派ありし

柿崎の法派ありし

柿崎

柿崎



とて方々西にわたりあふたつたてて  
た子う小才ふ句做、語つたはせ  
けしとまむ坊々をゆきゆきあむむ  
た子をまねははるゆきのあつた  
ふよりいふあつたよりのあつた  
丁重くまておぼえてまて故屋のふた

新をそよりまてねてけし  
こふかろふ旅をゆきゆきあ  
けしやんん中まむいにて陶器を  
のちよりいふ名あつた  
けしや

ゆきとまは安はけりりや  
部三  
ま

ゆき

聖衆院

五月雨の夕日や  
あつた  
あつた

帆をまろくと仲の涼月  
一万

か途のわきを携へる碇きて  
七

ちよりのかりかえ服の良  
五

月の名もとて方々まむ  
後詔  
五

扶校しとてあつたよりのま



移れてはなむの秋さひし  
文詞

婦人のえふ用かゝりて  
坊

称ゆふまゝの事それなり  
考

西かゝりてはなむなりや  
士

白壁の木のらおんじ能を  
望

何と買ひしえれぬ商人  
詔

とあるはしりてはひま  
五  
詞

二百十にを  
中

又新の郡とては月をた  
坊

身とほちせと能のり  
夫

お二きのお袖むしり  
士

さりありよんまの女  
望

お千お話ありて描の  
流

武士の隙ををさ  
又

世とけし今をう  
洞

謎しく智あるつ  
坊











新原

中をえき

東を信

蓮のさうなちうりなれ新原

以隣を平

えつ果の白ふとわり

醫者書や  
あつ

佐角號

ちりふふへ角を一併くふ  
鶴牛

七里子留せ

鑑三平

先ふつて喰ふおよりけり胡瓜汁 七里

お下や下とのうゑ果の中 きた

けろの湯をこまかしくあひ 蒸竹

せれ居てのきみらえり 里

各月をさるね時と新 考

必帯をまうくまうく 竹











河津舟辞

舟中作

吾が川北七里おふねん〜て人ふみき  
やそのりみりや〜こりへ馬と河津  
お少〜めてけ言をよふそとをたる小  
舟〜て〜れ〜ん〜は〜あ〜う〜され〜新〜江  
を人の心をや〜ある〜りその海をま〜く  
〜〜〜〜つ〜ふ〜を〜池の凡俗  
〜て固お船名をのぼるれ〜あり〜  
昔が川北のく〜と〜るおたおた

和漢の文藝をふり〜て〜る人の  
手紙と〜〜と〜を〜の〜を  
や〜あ〜を〜池の富饒を〜  
公〜〜その中おけ肌骨ありて詩の  
〜して東坡の〜を〜あけ筆下を  
お〜して〜を〜机を〜人〜  
お人と〜を〜や人を〜に  
速〜り〜あ〜〜を〜  
〜人〜不似て遊んで〜と  
〜た〜の〜中の一物お〜の〜







か片或を眉垂る雲のまをりつへて一白  
の風花お人をよりくもりておちくい草垣  
乃仇流おまをりて土地の血脈を流すれは  
きりし吾が川その中お盤龍にてある所を  
沖館仰揚お人向すれぬ南とくみ  
しより時を酒肆嬉居るお龍宮一お  
のまをりとさりてその比くしおまの  
河よりよりあそびて金せ方祈真りや  
るやうふりてをよめてめあひありれ  
まゝとあつととおちや或るお勝の人

おまねうれて孫お吾うと言を感され或ら  
権柄の家おまをりて孫おお吾う膝  
をひくしむとわくら能流のやぶりを  
ねされをぬえらうとくむとつるお老  
の家のおひちりうへ吾が川は是非お  
あそぶりて十余ねぬふるやれお  
おそくおりりやさんどさるん世後の  
をひありて吾が川おまをりておまをり  
さるん今やけ地をおちんやすらに  
けおと功仇のよめありてその名おの



〜〜〜と云けく時お以隣あり意作  
ありて実を〜〜むのありありか〜の兵  
環玕の海〜〜と云て 強<sup>ホリント</sup>鏡川〜〜と  
ありありハ兵一<sup>ホリント</sup>体の酒屋〜〜と云  
之の各坊を強ふ六七丈あり〜  
と云とおありに火折の一角あり〜  
兵が川人ふゆ〜〜と云 兵をぬ〜  
あり〜と云と七聖曰を強ある人 世  
多、兵のた二たありて解々同強  
と強家のたあり〜と云 兵をぬ〜

古今の雄雄ホ〜〜と云 曰その〜  
ふ〜 兵々つ 兵家のた〜  
け〜あり〜と云 後あり〜  
は強あり〜と云 笑て曰と云〜  
神助を〜と云 あり〜 浪人のた  
〜ひい〜と云 園の火折〜  
は〜と云 二たあり〜  
と云 兵〜と云 兵の〜  
ふら〜と云 兵あり〜  
兵のた〜と云 世〜 兵助を







これとちうてやむへ ちうへい今世の寛大  
ちうへい後世の無窮ふあうじむいん  
のちうへいに水うふんちうへい其の公  
病の音音ちうへいてふのけねの人のん  
ちうへいとちうへいよ馬を何回おとちうへ  
い言とちうへいのちうへい公の徳治のた  
ふあちうへい言治の理ふん  
あちうへいちうへい

寛永成子のちうへい六月

五江は

極糸ち解

これとちうへい思輪廻の中ち極糸ちちうへ  
ありてちうへい衣衣とちうへい糸糸  
ひちうへい月ちうへいちうへい糸糸ちうへい  
山<sup>ワサヒ</sup>のちうへい糸糸ちうへい糸糸ちうへい  
といちうへい糸糸ちうへい糸糸ちうへい  
ちうへい糸糸ちうへい糸糸ちうへい糸糸  
ちうへい糸糸ちうへい糸糸ちうへい糸糸







のりよきものうろろと作檀のふり  
和合して入院のきくふくまやーん

極楽寺 四三  
もき

梅

極楽と先轉をす梅のむ

そ

貫仙

そわし繁衣うしうてねふさ

梅

佐巴

七寶の指きてく次はく

何さ

花如

原仰と起てゆきやわや部ひ

橋

盤泉

きくらむの揉ましくし起仰

編福

許丹

かゝりやむふあろくつ指ま井



梅子

各人

ありかくやきさかたのほのほ

序

胡律

仲おつら丁のさきんやま

兼

里風

測ぬをさうやあまのねふ

片影

中ト

さささあささあささあささあ

まも

過角

ねつら仏陀の長柄やま

天人

陸相

ねふをみ筆舞うて

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*



南會木あり附極楽ちふまらうて  
東長老おしりまらうて我りともり  
他諸の作とこのて作ふあされ  
といひあありすとありまらうて  
未來孫ふさとせられて他諸を  
かぶりせよとおしりま作ははく  
附あふりーとさうあの一偈ふ悟入  
りきりうとれと阿伽達婆女佛の

はまふりて從來の技術をりーとら  
我お寂靜ふら入らりー。新と  
從來の作をはくして長老と考仙  
あふ六月の央と天ふくまのてふて  
跡を清くきりんまふもを笑て  
是ふとんさふ我あふ師のれを  
さるまらんや會木まらてふふ  
向へらと長老あてふふさう  
めく



余時

神懸や張良履と持け 南木  
剣と袖ふまぬを折る 東木  
尾むらり尾上を侍の名ふて  
物とまゝとよむ人とまよ  
まほ中のい者きそらふ時物  
うへはととありは金屏の照

降人とららききりあの九寸  
のあり本陰ふ一程のを  
かへるる思ひ居りて  
まほ坂の園ふ縮あせむ  
松青ふられ利とらひあふる  
襟又まよふてふかり上履え  
うは玉のおよみ恨とて  
まよてまよてり屋のあふ



戸限の力およりぬ世を引  
蘇心をたいていふふ里人  
駕ふ狐を化猫と嫁のむ  
きりくくよありとよ枝  
やうりれまふれしらく鞆鼓様  
ひろくくううたよ熱帯の  
ねりねや今の先の三  
ち依のむのまふ十一  
本  
本  
本  
本  
本  
本

暖屋の狐を目も細をたつお  
おれりも老のおくわも  
まふらんく起り掃かきぬ  
ま近のの膝打とやら  
尻吹き井のふふきん  
けふ各うりまの下と  
一天と鏡あてく次月の  
序と筆一ふ白を掃  
本  
本  
本  
本  
本  
本



とくしつ又とくしつ  
二疾ふみふを隠す  
調合と効果をト智恵  
にのし食してその物  
むらや其角うその  
草のよふはのよふ  
くくくくくく

東は山は海はあり  
とこの中やあんな  
りあるむら  
まねを芭蕉片一  
くふけるはとま  
あふふふふふ  
作と不作とを自  
めとるめとを自  
まふまふまふま  
た七







けいしー細なの人く小野ーて新ぼ小鑑卒  
 のありーと見えしー系原川ふ石由宮の  
 南人ありかりて高田まればのらふその  
 人ありすまふへつやあやまらぬ我家の  
 秘蔵とすし何うとけいなくしんけいお  
 例の執中の趣向と至てふのまよふ仙  
 の境をそ変化すりしりはと不依とを  
 自在の場ふけいけいけいけいけいけい  
 上のきりふれりけいけいけいけい

趣向

助	鮭	有	尾	花	身	人
寄	麦	切	金	屏	降	糸
月	逢	坂	葺	持	上	願
恨	虫	金	銀	祈	神	甲
人						人



解回

ゆ懸や湘竹の夢の醒る  
海を襟ふれるありけ  
らる所を危むみ秋のさ  
まうよむ人をとるれけ  
そとゆゑに覺はけぬ詭を  
久に中つゆふ金屏の照

降ふのくまをこし  
那えあつる所の友を  
と波や岸よりあつと月の  
今を逢はれを驚し  
草花も隠る者噴き  
油も笑ふてみ  
そら原をとおさ  
金を



祈れし所を今神に候へ  
まうかりをわさし西の里人  
鳴りしありなまきてもの  
ねとまうかたてまうのゆ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

又通

ふね十月三日ありふらふらふら  
つね候すを年こつてまう

駒子土

いんあし小まのこの月

月てまうとまうこ

九日のまうや十日り十月

まにはの連えお一井とま  
あまかまう仙のおあり  
馬は系統のほくくおける



後おのゝ

君を金城よりしよと  
まはけしゆりされぬ  
のゝく内侍者町の狐  
あそびみちやとね

つねに里の枝

つねに里の枝

つねに里の枝

つねに里の枝

文通

系ある川

いづれのいそぎ  
をなすことか

連中いそぎ

いそぎ

穢事やいそぎ  
おのけや西風  
うねるを森て  
川の連の廣



行人をそれうれしと来灯籠 級白  
其の種や袴をうろく鮎のさ 後夕  
柳水木とちりや柳の行り 未英  
吟くさうとや柳のけり竹節 温く  
重厚ふそ枝抱て中川 仰ふ 九胡

七月十日

高田系十

如くも初巻板行

蕉門俳諧書目録

寺町二條下 柏屋勘右衛門板行

蓑衣

東花坊木曾ヨリ三越路行跡ノ集ニ地七里ニ蕉ウノ俳諧  
ヲ示ス辞并ニ並江極ホキノ解蕉ウ附方執中ノ法  
趣而ノ取様多ク誌ス集也

越後名跡

東花坊越中越後ニ遊テノ集ニ紀行文章早急句  
寄病床ノ記ヲ誌ス

東六馬

宇中焦之洛東双林寺阿弥亭月見  
ノ句ニ東花坊各々句評ス花ノ句ニ宇中評ス  
連中涼菟支考吾仲其外

七句集

孟遠越闌四季ノ急句七句宛テ集充  
連中 達人ノ

山中ノ笑

加品山中温泉入湯ノ記ニ昨庵伯老  
連二坊三人ノ



孫藻集

齊中書佐用集之菊阿東花坊之經藻著其外越之連中各有一文章方於二之越路行脚ノ集也

不麻集

浪化公ノ日記草稿ノ終二出入下卷八處ノ追善ノ勺ヲ集ルモノ也

鳩徒集

文州師七廻忌ノ集也撰者曾九坊

越日能苑

越ノ過角力父竹凡七廻忌追善集之東花坊極ホノ三品ヲ題シ勺毎二款文ヲ入

阿誰話

東花坊追善集自孫藻ノ記ヲ誌ス連中万子秋々皆小枝八葉

桃道人

趙小枝

津色ノ能價

蓮房作

全部九冊





